

文学の世界から自己をひらく
～系統的な読みと交流の言語活動を通して～

1. 設定理由

新学習指導要領では、これからの時代を「予測が困難な時代」と表している。今日的課題の様々なに対して、文学の教育は、文学テキストとの出会いと解釈を通し、人間や社会、自然との関わりを持ち、自他の在り方について考えを深めることができるという、有用な価値を持つものと考えられる。

そこで、文学の読みと交流を中心とした系統的な言語活動を行うことによって、自らの考えを形成し他者の読みに触れ、学習者に内在する価値観の変容をとらえさせることで、これからの時代を生きる力を育みたいと考え、本主題を設定した。

2. 研究仮説

文学の読みを顕在化させる言語活動を充実させることで、人間や社会、自然との関わりについての自らの考えの形成が促進されるであろう。

また、言語活動については系統性を重視した活動を行うことで、作品の特性や価値を理解し伝え合う力や、語彙の充実といった資質・能力の向上が図れるであろう。

3. 研究内容

単元名 （1年）本の帯を作ろう、（2年）本のポップを作ろう、（3年）本のリーフレットを作ろう

- ・文学作品を読んで自分の考えをまとめ、自身の体験や価値観に向き合うことができる。
- ・交流を通して他者のものの見方や考え方、解釈に触れ、自らの読みをより深めることができる。
- ・文学作品に対する目を養い、作品の特性や価値を理解することができる。

4. 結論

○文学の読みを帯やポップなどに表現し交流することで、文学作品が持つ魅力、自らの体験や知識、そして他者の読みの三者を関連させて考え、自他の在り方について考える学習となった。

○言語活動については系統的な活動を設定することで、学習意欲の向上や、振り返りの学習の効率性を高め、資質・能力の定着を達成することができた。

○学習の目的を達成するためには、質の高い言語活動を検討し設定すべきである。

○学習の内容が単なる読書活動で終わらず、文学的な文章を「詳細に読む力」を身に付けさせる指導として成立しているか否かについては、十分に検討し改善する必要があるものと考えられる。

文学の世界から自己をひらく ～系統的な読みと交流の言語活動を通して～

1. 主題設定の理由

(1) 今日的課題とこれからの文学教育の在り方について

2017年(平成29年)6月に公示された次期学習指導要領では、今の子どもたちやこれから誕生を迎える子どもたちが生きる時代を「予測が困難な時代」と表している。現行学習指導要領では「知識基盤社会」という用語を用いていたが、人工知能の飛躍的な進化を要因とした知識の急速な進展に対して、不変的に持つべき人間の価値観が重要視されているようにも思える。

文学教育について山元隆春(2013)は「この10年間の文学的文章領域の実践研究で問われ続けたのは、ひとりひとりの読みとの関係であった。「ひとりひとりの読み」(私有性)と「集団の読み」(公共性)とのあいだで、文学の授業を営む者は絶えず切り裂かれるような思いを抱くことになる。」と述べた。文学作品との出会いや解釈を通して自己内対話を営み、集団の読みにぶつかることで自己倒壊そして自己創造を促していくことは、文学教育が学習者に資するところの一つである。現代の課題と照らし合わせて考えれば、おのずと文学との出会いが、この予測困難な社会を生きることの疑似体験となりうることに気づかされよう。

「予測困難な社会」を生きるために、学習指導要領では育成をめざす資質・能力の明確化が図られた。国語科の改訂においては特に「(2) 学習内容の改善・充実③学習過程の明確化、「考えの形成」の重視」、「(3) 学習の系統性の重視」に着目したい。

「考えの形成」については、PISA調査を受けて2005年(平成17年)12月に文部科学省から示された「読解力向上プログラム」よりすでに、身につけるべき能力として指摘されてきた経緯がある¹。今回の改訂においては「読むこと」以外の領域の指導事項の中にも「考えの形成」という観点位置づけられ、学習の中から自己を見つめ、考えを伝え合うことで主体的な学びを育んでいくことが期待されている。また、指導内容については系統的・段階的に設定がなされ、螺旋的・反復的な繰り返しながらの学習が望まれることが明記された。言語活動例においてもその系統表が示されている。系統的な学習を通して、学習者自身が活動を振り返り、学習内容の関連性を理解したり、自らの言語能力を的確に把握したりすることが期待される。

これら今日的な課題と、それら課題を解決し予測不可能な未来を生きるために求められる資質・能力の習得をめざすことを踏まえて、本単元は「系統的な読みと交流の言語活動を通して、文学の世界から自己をひらく力を育む」ことを主題として設定した。

(2) 生徒の実態

本稿では3つの授業実践を取り上げる。

	ア	イ	ウ
学級	1年3組	2年2組(現3年2組)	3年2組
日時	2017年(平成29年)6月	2016年(平成28年)7, 9月	2017年(平成29年)7, 9月
単元名	本の帯を作ろう —「ベンチ」—	本のポップを作ろう —読書への招待2「坊っちゃん」—	本のリーフレットを作ろう —読書への招待1「無言館の青春」—

¹ 「読解力向上プログラム」ではPISA型「読解力」を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義している。

上の表のとおりこれらの授業実践は2学級によって展開されたものであり、本来であれば3つの実践を同一クラスにおいて3年間を通して学習することで、系統的な学習の成果等も十分に観察することができるものの、学年分担等の事情により3年間を通した研究として行えていない点を留意していただきたい。

次は授業実践Ⅰを設定する際に、芥川龍之介「鼻」を読んだ初発の感想をもとにしたアンケート調査の結果である。学習者の文学的文章の読み方についての意識と、言語活動に対する認識を測ることを意図したものである。

文学的文章の読み方についての意識調査

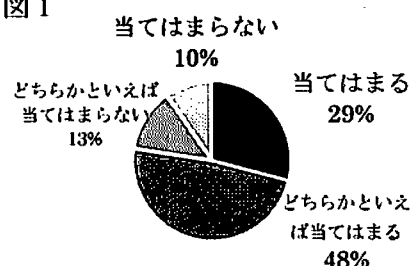
【調査日 2016年（平成28年）6月27日，2年2組，男子14人女子17人，計31人】

※以下，回答の①は「当てはまる」，②は「どちらかという当てはまる」，③は「どちらかといえば当てはまらない」，④は「当てはまらない」を示す。

〈1〉作品に興味や関心を持ち，意欲的に感想文を書くことができた。

①…9人 ②…15人 ③…6人 ④…3人

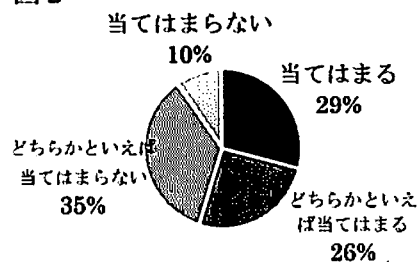
図1



〈2〉作品中の登場人物や，世界観について，想像を膨らませながら書くことができた。

①…9人 ②…8人 ③…11人 ④…3人

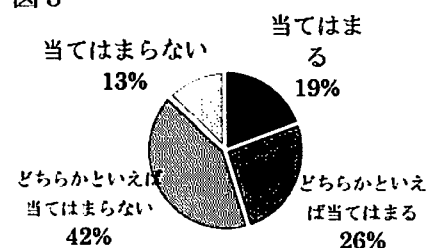
図2



〈3〉物語の中に表れるものの見方や考え方に触れて感想を書くことができた。

①…6人 ②…8人 ③…13人 ④…4人

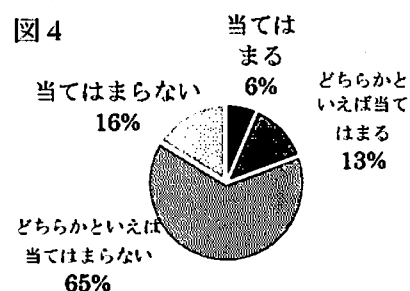
図3



〈4〉物語の中に表れるものの見方や考え方に対して，自らの考えを書くことができた。

①…2人 ②…4人 ③…20人 ④…5人

図4



〈1〉の質問結果より、「感想文を書く」という活動への抵抗感を抱く生徒は少数であり、80% 近くの学習者が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を選択し、表現意欲を持って活動に臨むことができていることがわかった。〈2〉と〈3〉の質問は読みの意識と考えの形成に関する質問である。〈1〉に比較して「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の割合が減少しており、文学的文章を読む際に、ものの見方や考え方を読み取ろうとする意識や、またはそういった読みの経験が乏しいといったことなどが予想できる。また、〈4〉「自らの考えを書けたか」という質問に対する「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答では、さらに割合が減少しており、文学的文章を表層的にしか読めず、解釈を与えたり、自らの体験や経験と関連付けて考えたりすることができていない状況が推測される。

本学級はこれまでの授業において、特に「書くこと」の言語活動を重視した実践を積み重ねてきた。実生活の中に実在する言語材料（新聞投書や書評など）に即した文章を書くことで、人間や社会、自然との関わりに目を向け、考えの形成を促し、さらには論理的思考力を育んでいくことを目標としてきている。

学習者の「書くこと」に対する表現意欲や必要意識は、実践を重ねた成果もあり、高い水準にあると言えるだろう（〈1〉質問結果参照）。しかし、書くことの言語活動を通して自らの読みやその過程を対象化する学習の経験はこれまでに多くなく、「書く」という活動に「読む」ことの学習が顕在化されるという認識は学習者自身も希薄である（〈2〉、〈3〉質問結果参照）。言語活動を通して、自らの読みを見つめ直したり、他者のものの見方や考え方に会ったりすることで、互いの差異や共通項を顕在化し、自己内対話を重ねることができる。こうした学習の体験が、学習者の考えの形成をより一層促すことへつながるものと考えられる。

2. 研究仮説

文学の読みを顕在化させる言語活動を充実させることで、人間や社会、自然との関わりについての自らの考えの形成が促進されるであろう。

また、言語活動については系統性を重視した活動を行うことで、作品の特性や価値を理解し伝え合う力や、語彙の充実といった資質・能力の向上が図れるであろう。

3. 実践

（1）実践ア

①単元名 「本の帯を作ろう ―「ベンチ」―」

②学級 1年3組（男子17人女子16人、計33人）

③日時 2017年（平成29年）6月

④指導計画および展開（4時間扱い）※関心・意欲・態度 ▼読む能力 □知識・理解・技能

時間	学習活動	教師の指導・支援	評価規準
1	「ベンチ」を読み、登場人物の心情や作品の背景を考えよう。 ・全文を読み感想を書く。 ・資料から時代背景などを	・現代と異なる時代背景や情勢を整理し、登場人物	※歴史や差別といった問題についての情報を集めな

	調べる。	の心情や行動の理由を理解させる。	がら、作品の文脈と関連させて感想を書こうとしている。(観察)
2 3	本の帯を作ろう。 - 各自が持ち寄った本の帯を確認し、デザインや構成している要素を分析する。 - ワークシート(資料1)を用いて本の帯を構成する要素を下書きする。 - 画用紙に清書する。	生徒が持参した帯がモデルとなる。モデルをよく分析させ、まとめられるようにする。	▼作品の特性や登場人物の心情を読み取り、工夫して表現することができている。(ワークシート)(作品)
4	本の帯を読み合おう。 - 完成した作品を読み合い、互いに評価し合う。 - 学習の振り返りとまとめを行う。	複数の作品を比較させることで、工夫した点に気付かせる。	※読み取ったことや調べたことを比べ、自らの表現に役立てようとしている。(観察)

⑤実践アのまとめと考察

登場人物の言動から心情を読み取り、その解釈を帯の要素として構成する工夫が見られた(資料2)。交流の場面ではこの帯を学級全体で取り上げ、この生徒の読みの表出に対して活発な意見の交換が行われた。自分の考えを形成することを交流を通して価値ある学習活動として成立させることができたと考えられる。

(2) 実践イ

①単元名 「本のポップを作ろう ―読書への招待2「坊っちゃん」―」

②学級 2年2組 (男子17人女子18人、計35人)

③日時 2016年(平成28年)7,9月

④指導計画および展開(6時間扱い)

時間	学習活動	教師の指導・支援	評価規準
1	近代文学作品に触れよう。 - 図書館や書店に掲示されているポップを確認する。 - 芥川龍之介「鼻」を読む。	学習の見通しを立て、目的意識を持って作品を読み進められるようにさせる。	※ポップの作成に活用できそうなところに線を引くなど、目的意識を持ってとりくんでいる。(観察)
2	「鼻」のポップを作ろう。 ワークシートを用いて、ポップを構成する要素を下書きする。	構成する要素を理解するために、モデルをよく分析させる。	▼読み取った内容や自らの考えを文章にまとめることができている。(ワークシート)

		・ポップは、「引用文」「あらすじ」「キャッチコピー」を必ず入れるようにする。	シート)
3	ポップを作るための選書をしよう。 ・自分が読みたい本を図書室やインターネットを活用したり、図書館司書に相談したりして調べる。	・司書の協力のもと近代文学作品を図書館に準備してもらい、課題に適した選書をできるようにする。	※様々な本の中から興味や関心が持てるものを、集めた情報を活用しながら選ぶことができています。 (観察)
4 5	ポップを作ろう。 ・ワークシート(資料3)を用いて、ポップを構成する要素を下書きする。 ・消書用の画用紙に仕上げる。	・語彙表(資料4)を活用してまとめさせる。	▼作品のテーマや、自らの体験との関わりを考えながらまとめることができています。(作品) □語彙表を活用し、表現を工夫することができています。(作品)
6	ポップを読み合おう。 ・実際に選書した本とともにポップを並べ、グループごとに鑑賞と交流を行う。 ・読んでみたいと思った作品や、ポップの良かったところを発表する。 ・学習の振り返りとまとめを行う。	・交流するグループを工夫して編成することで、比較や発見を促し学習の効果を高められるようにする。	▼観点を押さえて鑑賞し、ものの見方や考え方を広げることができています。 (発表)(ワークシート)

⑤実践Ⅱのまとめと考察

教科書では教材として夏目漱石「坊っちゃん」が採録されているが、文章を読んで自分の考えを広げるといった学習目的を踏まえて、精神的葛藤やコンプレックスといった人間の心情を描いた短編である芥川龍之介「鼻」を扱った(資料5)。第3時間目より多様な近代文学作品に触れ、それぞれの作品の魅力や特性を読み取り、ポップにまとめることができた(資料6)。一方で、作品に現れるものの見方や考え方について意見を述べたり、自らの体験や知識と関連付けて自己内対話を試みようとしたりする学習者が少なかったことが課題であった。

完成したポップを読み合う活動では、作品ごとに類似する点や違いを発見し、自らの考えを広げようとする様子が見られた(資料7)。読みの交流においては考えや立場における多様性や異質性が必要であると指摘される(寺井正憲(2012))。ただしこのような指摘は一つのテキストに対し

て、学習者がそれぞれの体験や学習履歴をもとに、多様な解釈を与える場合を想定しており、本実践イ、ウのように学習者ごとに異なるテキストによって学習が成立している場合には、反対に多様性の中に共通の価値や普遍性を見出すような交流も意味を持つようになる。その点において、話し合いの活動の中から類似性、差異を発見できたことは今後の学習にもつながる成果であった。

(3) 実践ウ

①単元名 「本のリーフレットを作ろう ―読書への招待1「無言館の青春」―」

②学級 3年2組 (男子16人女子18人、計34人)

③日時 2017年(平成29年)7, 9月

④指導計画および展開 (5時間扱い)

時間	学習活動	教師の指導・支援	評価規準
1	「無言館の青春」を読んで、自らの考えを広げよう。 ・「無言館の青春」を読み、感想を書く。 ・感想を発表する。	・学習の導入として視聴覚教材を用いて、興味や関心を持たせられるようにする。	※感想をまとめ発表することで、知識を広げたり、考えを深めたりしようとしている。(観察)
2	「人生を変える1冊」を探そう。 ・図書館やインターネットなどを活用して、自らの「人生を変える1冊」を探す。	・2学年次にとりくんだポップを掲示し、気になる本や作者を見つけさせる。	※これまでの経験や読書体験から、自らの考えを広めたり深めたりできるような本を選ぼうとしている。(観察)
3 ・ 4	本のリーフレットを作ろう。 ・ワークシート(資料8-10)を用いて、リーフレットを構成する要素を下書きする。 ・画用紙に清書する。	・教師モデルからリーフレットの構成や編集後記のまとめ方を分析させ理解させる。 ・語彙表を活用させる。	▼作品の魅力や特性に対して、自らの経験や社会との関わりなどを通して意見を述べることができる。(ワークシート)(作品)
5	リーフレットを読み合おう。 ・実際に選書した本とともにリーフレットを並べ、鑑賞と交流を行う。 ・読んでみたいと思った作品や、リーフレットの良	・交流の観点を明確に示すことで、話し合いを行うことの目的を意識させる。	▼編集後記などから友だちのものの見方や考え方、さらには文学作品の読み方を発見し、交流を通して自らの読みを深めよう

	かったところを発表する。 ・学習の振り返りとまとめを行う。		としている。(発表)
--	----------------------------------	--	------------

⑤実践ウのまとめと考察

2年生次の「本のポップを作ろう」の単元の反省を踏まえて、選書から自らの体験や知識と関連付けてとりくもうとすることができた。リーフレットを構成する要素の一つである編集後記の作成においては、「人間や社会、自然との関わり」という視点から文学作品を見つめなおすよう助言することで、多様な視点から作品の解釈を試みることができた。文学作品の持つ魅力と、自らの体験、そして「人間や社会、自然との関わり」という社会的な視点の各要素が、リーフレットを作るという言語活動によって互いに作用し合い、学習者の読みを深める活動へと結実させることができたと考えられる(資料11)。5時間目に行われた、話し合い活動による考えの共有の学習では、お互いの読みに対してさらに自らの体験や経験を重ねていくことで、自分の考えを補強的に強めていく学習者や、柔軟に考えを広げていく学習者の姿を見ることができた(資料12・13)。

(4) 実践ア～イの系統性について

中学校第1学年から第3学年までの「考えの形成」についての指導事項と、「読むこと」の領域における言語活動例(特に文学的文章に関連すると思われるもの)についてまとめると次のようになる。(波線部は論者注記。)

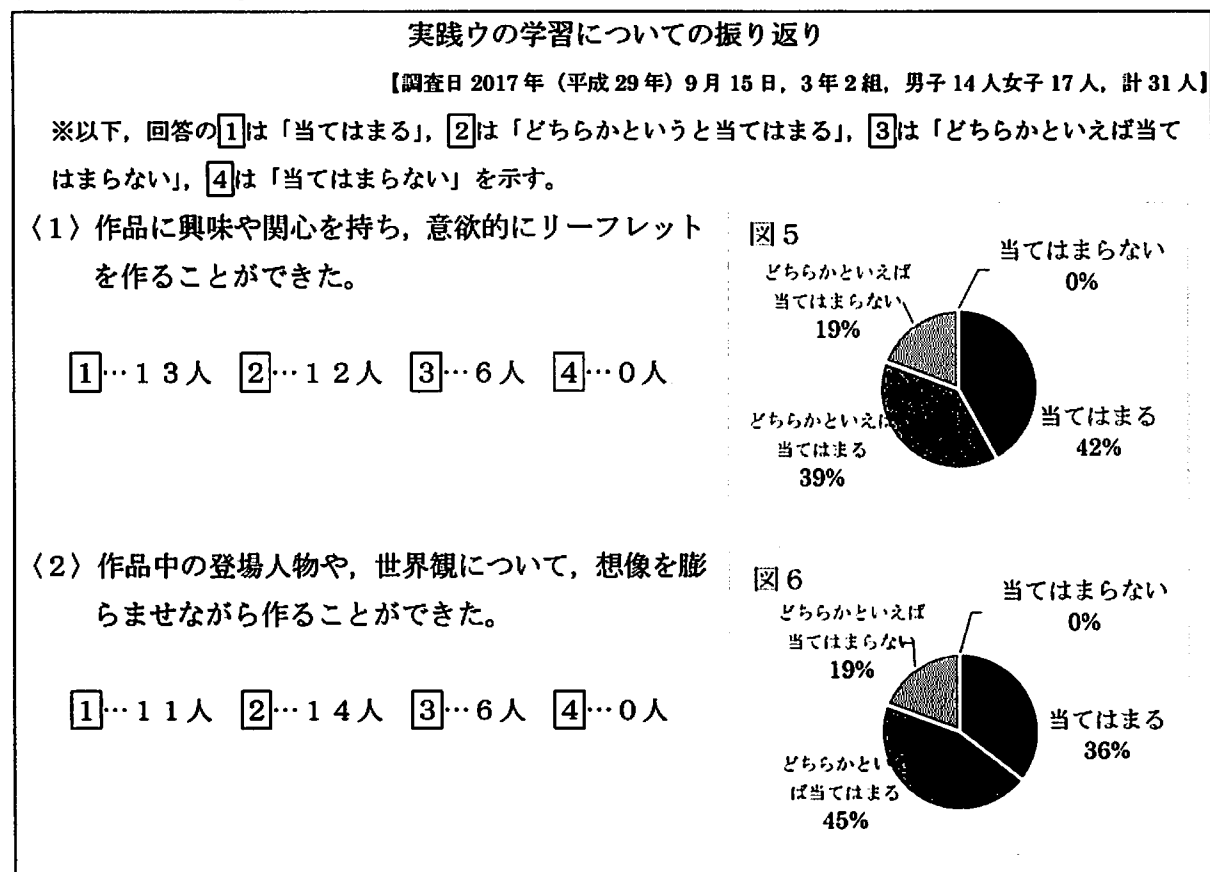
	考えの形成、共有に関する指導事項	(現行学習指導要領における「自分の考えの形成」に関する指導事項)	言語活動例	本単元の言語活動
第1学年	オ 文章を読んで理解したことに基づいて、 <u>自分の考えを確かなものにすること</u> 。	オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること。	イ 小説や随筆などを読み、考えたことなどを記録したり伝えあったりする活動。	文学的文章から読み取った登場人物の心情や行動の理由などを本の帯としてまとめ、交流を通して自らの考えを確かめる活動。
第2学年	オ 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、 <u>自分の考えを広げたり深めたりすること</u> 。	エ 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えを持つこと。	イ 詩歌や小説などを読み、引用して解説したり、考えたことなどを伝えあったりする活動。	文学的文章から読みとった主題などをポップとしてまとめ、交流を通して自らの考えを広める活動。

第3学年	エ 文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、 <u>自分の意見を持つこと</u> 。	エ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見を持つこと。	イ 詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。	文学的文章から読み取った主題や、人間、社会、自然などとの関わりの観点から批評した文章などをリーフレットとしてまとめ、交流を通して自らの考えを深める活動。
------	---	--------------------------------------	--	--

次期学習指導要領では第1学年で自らの考えを「確かなものに」し、その考えを第2学年でさらに「広げたり深めたりすること」で、最終的に「自分の意見を持つこと」につながるよう設定されている。自己内対話を繰り返し、徐々にその考えを外に発信していくイメージが読み取れよう。現行学習指導要領と比べても、習得した資質・能力を次の段階へと生かそうとするねらいが明確になっている。右にはそれらを受けて本単元の言語活動を追記した(太枠内)。「考えの形成」を段階的に、また、3年間を通して反復して深化させることをねらいとしている。

4. 成果と課題

次は実践ウ終了後に実施した学習を振り返ってのアンケートである。質問項目は「(2) 生徒の実態」に示した、実践イを学習する前とほぼ同じ内容になっている。二つのアンケート結果の比較を図9に示した。



〈3〉物語の中に表れるものの見方や考え方に触れてリーフレットを作ることができた。

①…15人 ②…11人 ③…5人 ④…0人

〈4〉物語の中に表れるものの見方や考え方に対して、自らの考えを書くことができた。

①…17人 ②…9人 ③…5人 ④…0人

図7

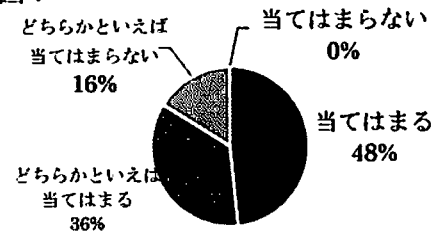


図8

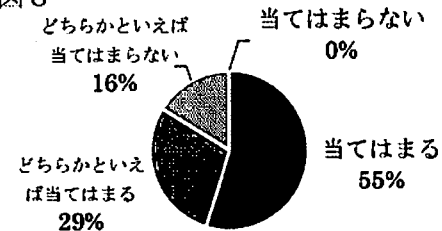
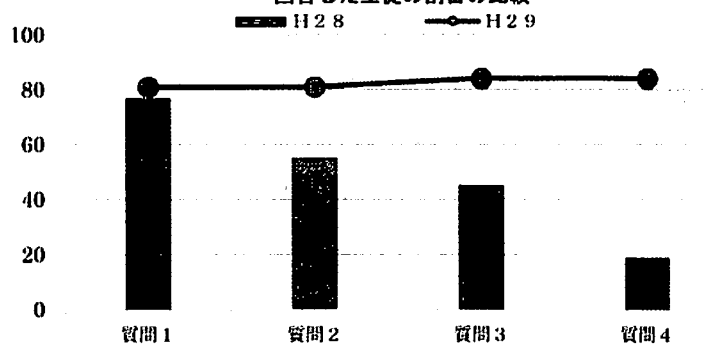


図9 各質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の割合の比較



このように、実践ウ「本のリーフレットを作ろう」では、文学作品が持つ魅力、自らの体験や知識、そして社会的視点の三者を関連させて考え、作品の解釈から自己内対話を試みる学習者が多く見られた。こうした学習が成立した要因は、次の二点にあると考える。

成果

①一人ひとりに多様な読みを可能にする機会を与え、それを実生活・実社会に関わる言語材料として顕在化することができたこと。

ポップやリーフレットといった言語の材料は本来、商業的な目的など、生活の中で役割を果たすものであり、学校の中でも図書館での掲示等において活用される。実際に本単元でも生徒のポップ作品を学校図書館において掲示し、生徒の選書の手助けとして活用されている(資料14)。学習の目的を授業の中で終えるのではなく、それを日常生活や学校生活の実の場において生かすことも、学習意欲を高めるポイントの一つである²。

学習者がそういった目的意識を持って文学作品を読み解き、自らの解釈を表出していく過程の

²大熊徹は授業以前の学習意識の醸成と、実の場の設定における目的意識の向上を提言している。

大熊徹「国語科学習指導過程づくりーどう発想を転換するかー習得と活用をリンクするヒント」(明治図書2011)

中で、多様な読みが生まれ、交流を通して多角的な視野や批評的な視点を持つことに至ることができたと考えられる。

②系統的な単元設定をすることで、学習者自身が資質・能力に対する振り返りを行い、次の段階へと挑戦する意識の涵養がはかれたこと。

2年生次にとりくんだ実践イでは、意見を述べたり、自らの体験や知識と関連付けて解釈を試みようとしたりする活動が不十分になってしまったことが課題であった。学習者自身に前年度の授業を振り返る機会を設けることで、課題を認識し、より高次の学習へと発展をめざすことがスムーズであった。リーフレットの作成に当たっては、2年生次に活用した語彙表を再度活用しており、反復的な学習による語彙の定着と拡充といった成果も得ることができた。

課題

本実践の課題としては次の2点が挙げられる。

①学習の目的に対して適当であり、かつ質の高い言語活動を設定すべきであったこと。

上記2点のような成果が得られた一方で、言語活動の内容そのものについては再考すべき点があったと感じている。本の帯やポップ、リーフレットの作成といった活動は小学校から多くの実践があり、本単元の学習者の中にもとりくんだ経験を持つ生徒も多かった。授業者は既習経験を把握・活用しながら、各学年の指導事項の達成をねらいとして適当な言語活動を設定すべきである。

実践イでは、本のポップの作成を言語活動として設定しているが、成果②の項でも触れたように、自らの体験や知識と関連付けて解釈を試みようとする活動は不十分であった。実践イの目標を達成するための手立てとして、ポップの作成という言語活動が（もしくはポップを構成する要素とそこに至るまでの学習活動が）適当であったかは再考しなければならない。

実践イで達成できなかった点を次学年の実践ウの課題として学習者に意識付けできた点は成果の一つであるが、実践イで学習の目的を達成できていれば、実践ウではより発展的な学習にとりくむことができたという見方もある。学習者の学びを限定せず学習の目標を超えた発展的な学びへとつながる可能性を持つ活動が質の高い活動であると考え。本単元での実践を振り返り、系統性があり、かつ質の高い言語活動を設定できるよう今後の実践にいかしていきたい。

②文学的な文章を「読む力」を身に付けさせる指導が不十分であったこと。

実践ウ「無言館の青春」は教科書では読書単元として設定されており、また実践イ、ウのどちらにおいても第二次では学習者によって異なる多様な文学作品を教材として用いている。このように本単元は読書活動の単元としての色合いが強いものである。学習者と文学テキストの結びつきを重視した学習活動を展開するためには、常に読みの技術・技能を重視した学習活動とのバランスが課題となる。文学テキストをどうとらえるかという文学教育理論の根幹にかかわるような問題に対してここでは触れないが、「詳細な読み」を軽視すべきでないことだけは留意しなければならない。

5. 参考文献

- ・山元隆春「文学的文章の領域における実践研究」『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』（全国大学国語教育学会 2013）
- ・寺井正憲「必要感のある交流で考えを育てる」『月刊国語教育研究』481（日本国語教育学会 2012）

資 料

(資料1) 〈実践ア〉本の帯を作ろう・ワークシート①	… 1
(資料2) 〈実践ア〉本の帯を作ろう・本の帯	… 2
(資料3) 〈実践イ〉本のポップを作ろう・ワークシート①表 〈実践イ〉本のポップを作ろう・ワークシート①裏	… 3
(資料4) 〈実践イ, ウ〉語彙表	
(資料5) 〈実践イ〉本のポップを作ろう・「鼻」のポップ	… 4
(資料6) 〈実践イ〉本のポップを作ろう・本のポップ	… 5
(資料7) 〈実践イ〉本のポップを作ろう・ワークシート⑤	… 6
(資料8) 〈実践ウ〉本のリーフレットを作ろう・ワークシート②-2表 〈生徒A〉 〈生徒B〉	… 7 … 8
(資料9) 〈実践ウ〉本のリーフレットを作ろう・ワークシート②-2裏 〈生徒A〉 〈生徒B〉	… 9 … 10
(資料10) 〈実践ウ〉本のリーフレットを作ろう・ワークシート②-3 〈生徒A〉 〈生徒B〉	… 11 … 12
(資料11) 〈実践ウ〉本のリーフレットを作ろう・本のリーフレット 〈生徒A〉 〈生徒B〉	… 13・14 … 15・16
(資料12) 〈実践ウ〉本のリーフレットを作ろう・ワークシート③	… 17
(資料13) 〈実践ウ〉本のリーフレットを作ろう・交流の様子	… 18・19
(資料14) 〈実践イ〉本のポップを作ろう・ポップ作品の掲示	… 20

(資料1) 〈実践ア〉本の帯を作ろう・ワークシート①

本の帯を作ろう① いんち

一冊

(単元の目標)

☆一冊の本から情報を得て作品への理解を深め、広がった世界観を本の帯づくりに通して表現しよう。

1. 時間目 「いんち」を読み、本文以外の情報を集め、作品への理解を深めよう。

2. 3. 時間目 様々な情報を活用し、本の帯を作ろう。

4. 時間目 作成した帯を読んで交流し、効果的な表現の仕方や自分と異なるものの見方や考え方を発見しよう。

「宣伝文句」(アオリ文)

1. 本の帯を構成する要素について考えてみよう。

引用文 → 本文をその書を使う

(いんちに遡るストーリー) ・主役の絵と名前・おきたことが書いてある
場面は一つ一つの説明(あらすじ)が書かれている。あらすじは
続きを読めばなるよう水終りをしている。本の帯のやり方、引用文

① あらすじを八十字以内でまとめよう。

エ	タ	ヤ	人	の	フ	リ	ー	ト	リ	じ	が	ド	イ	ッ	人	の	ハ	ル	ダ
に	恋	心	を	抱	く	。	あ	る	日	公	園	へ	行	く	と	緑	の	ベ	ン
チ	ガ	あ	た	。	座	を	こ	た	は	評	大	ね	だ	。	エ	タ	ヤ	人	の
フ	リ	ト	リ	じ	は	座	を	こ	た	は	評	大	ね	だ	。	エ	タ	ヤ	人

② 本文の中から帯に用いたい引用文抜き出そう。

四週間ほど前だよ。事の起りは...

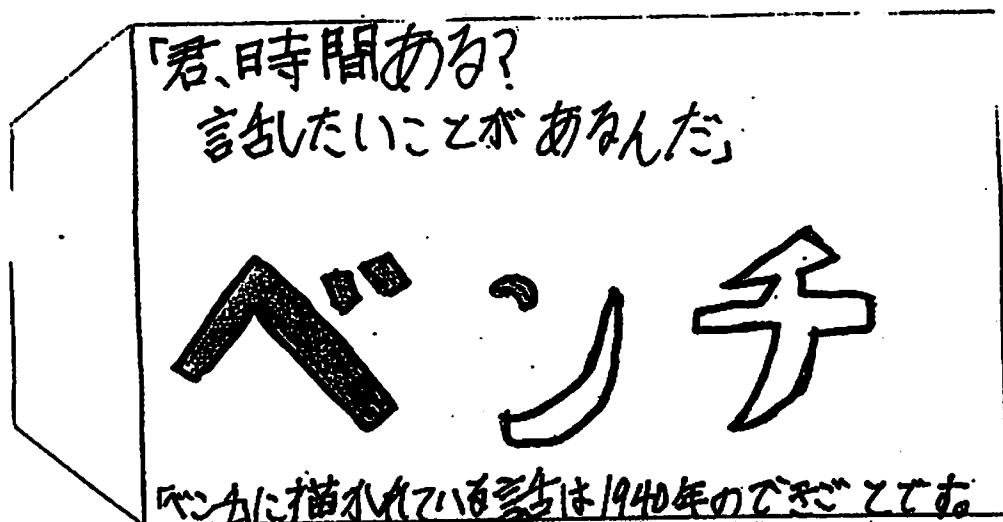
③ 「宣伝文句」を考えてみよう。

人種のおうア・リード・リ・ン・ル・ガ・の後の二人の関作は...

☆④ 「いんち」について調べてみてわかった情報を、帯に表現しよう。

(③「宣伝文句」の中で調べてみよう。) 本文に書かれていない情報を必ず入れる。

外出禁止時間 → ドイツ国内の男女に夏は二十時以後、冬は二十時以後の外出を禁止した。
緑のベニチ → エタヤ人は、黄色のベニチが定まる、これも許されなかった。



Point of purchase advertising

ポンプを作ろう①

★井山龍之介「」を讀んで、ポンプを書け。

1. 「ポンプ」は

「購買・研・研」の

図書館(室)では利用促進のため用いられ

2. ポンプを製造する装置はどのようなものだろうか。

3. ライトル ②作者 ③出版者 ④引用文 ⑤あらまし ⑥ポンプの

3. 引用文を考えよう。

④中最に選んだ文やフレーズを引用しよう。

⑤ポンプを見た人の興味や関心を引くような文を引用しよう。

⑥作品の雰囲気や情動に表すような文を引用しよう。

4. あらすじを書け。

ヒント 結果までを書かないようにし、読者の興味を引けよう。(百五十字以内)

長さは五六十センチ、上唇の上から頰の下まで下っている

の	う	っ	り	方	い	フ	て	池		
鼻	は	フ	内	法	フ	が	は	ハ	主	
に	顔	・	供	エ	・	内	受	尾	人	
何	エ	し	は	試	み	ル	に	心	公	
が	し	か	の	し	る	デ	し	知	の	
あ	て	し	が	フ	白	は	て	リ	神	
・	い	会	の	・	黄	こ	い	口	習	
フ	ろ	う	が	な	子	ハ	な	い	内	
の	・	人	し	と	鼻	鼻	い	者	供	
か	は	は	エ	と	鼻	エ	ふ	は	の	
・	に	皆	気	鼻	エ	舌	リ	な	鼻	
・	し	可	持	は	短	に	と	い	と	
・	て	突	ち	短	く	病	し	・	云	
・	内	し	に	く	す	ん	て	表	え	
・	供	も	な	は	ろ	で	い	面	は	

自分だけであらずじをまとめるのが難しい場合は、次の空間を収めてみよう。

①主人公の得意内供は、

あ	じ	の	下	ま	で	垂	れ	に	長	く	太	い	身	代
悩	み	で	あ	っ	て									

②ある日、弟子の一人が、

知	り	合	い	の	匠	看	は	り	身	と	短	く	す	る
方	法	を	教	わ	っ	て	来	た						

③しかしその夜、会う人は雪、

つ	い	つ	い	と	突	い								
さ	せ	た												

内供は周囲の様子に、鼻が凍くろなことがあつて泣き止んでしまふ。

5. キヤナナジロ

引用文と物語のあらすじの後に続く形で、ボアブを読んだ人が本を手に取りたくらるようなキヤナナジロを考へよう。

う。

「あはたも、主人様に自分も重なるにやうい。」

6. 滑書用紙に、3くもの内容と、左の本の表紙絵を切り取つてレイアウトし、「本のボアブを作つてみよう。」

（表紙絵引用）「羅生門」・森（新潮文庫）芥川龍之介

語彙表を作ろう

※特に物語の展開や文体について評価する語彙

平 假 名 辞 典

大分類

漢字や熟語を記入しよう

慣用句を記入しよう

美	感	笑	涙	興	真
鮮やかな あでやかな 金銀な きらびやかな 長い 優良な 装飾された	胸に響く 共感できる 心の移動に揺れる 引き込まれる 胸がいびきになる 印象に残る	おもしろい ツミカルな ユーモアがある 笑える 愉快な	涙を流す 泣ける 胸を打つ	興奮する ドキンとする スリリングな 緊張した スリル満点な 臨場感があふれる 夢中になる	爽快な 爽快感のある すっきりする 胸のすく ほろ酔い感の良い さわやかな すがすがしい 涙み切った
快	柔	明	難	穏	驚
透明感のある 滑らかな 快い 心地よい	余味な 簡潔な シンプルな わかりやすい	明るい 明確な	難解な 複雑な 複雑性高 暗黙的な	穏やかな 人情味ある のんびりした ほのぼのとした	驚く 驚愕の 驚天動地の びっくりする
	自然な 身しい テンポの良い			心算まる ハートフルな 微笑ましい 温かみのある	意外の 衝撃的な 過激な

(資料5)〈実践イ〉本のポップを作ろう・「鼻」のポップ

鼻

出版在名 新潮 文庫

主人公の禪智内供は、五六寸ある鼻が上唇の上から頰の下まで下っている。ある日弟子の一人が医者から湯で鼻を茹でて人に踏ませるという方法を教わ。てきて鼻は短くなった。しかしその後、言う人は皆内供の鼻を見て可笑しそうな顔をする。内供は周囲の様子に鼻が短くな。たことがかえって恨めしくな。てしまう。それにほ人間が持つるつの感情が原因だった...

人のバを見抜いた一冊！



角川文庫

芥川龍之介

袈裟と盛遠

〜けに人間の心こそ、無明の闇を果しや、

ただ煩惱の火に燃えて、消えゆくばかりぞ命はる〜
 (盛遠は袈裟と不倫関係にあったが、もはや愛していないどころか嫌悪したいにすら思いついて、一環として袈裟の夫を殺そうとする。袈裟は夫に対する情を身代りにけりしと決意した。一冊で自分を救った盛遠と複雑するたれ、東阿はこれだけ自分か盛遠を殺す覚悟があったが…)

欲望による  を
表現した王朝物の作品!



作者
芥川龍之介

杜子春

出版社
新潮社

大金持ちに三度な。たが、人間というものに愛想がのこれた杜子春。

仙人の弟子になろうと申し出たが、

「決して声を出さぬのではないぞ」と試験をうけられた。

色々のことがあっても、声を出さずか。た杜子春は、

ある出来事と目にし、一言発してしめた。

その後 杜子春は…

また、声を出さぬ。かきとば。たある出来事と目…



人間は人間らしく、正直に生きよう
と思える一冊。



○主題に触れてポップをまとめている。本実践で達成できなかった、ものの見方や考え方に対して自らの考えをもとに意見を述べるという課題は、3年生次の学習へとつながっていった。

ポップを作ろう⑤

年 級 年 名

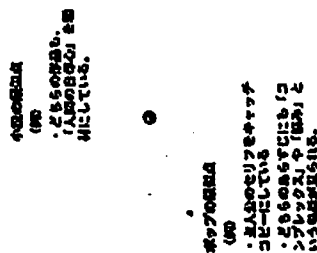
☆友達の作品を鑑賞し感想する紙や滑り紙について話し合おう。

1. ポップを見比べて感想する紙がないか話し合おう。

話し合ってもまだ意見をメモしよう。

「まどろみ」料理と「銀河街道の夜」はおどろき本にという内容で書かれている。
 まどろみは小説の文章や(まどろみ物語)から採られているものばかりだ。
 「まどろみ」は、主人のじいさんの変化と大団点は描かれている。

ポイント ポップの類似点の発見から、小説の類似点の発見を目指す。



2. 一つだけ選んだ類似点の中からキーワードを選び、それを元に感想や質問をメモしよう。

例「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。
 まどろみは「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。

「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。
 まどろみは「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。

3. 複数のポップを見比べて発見したことを友だちと話し合おう。

主人のじいさんについて、おどろき本に「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。
 まどろみは「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。

まどろみは「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。
 まどろみは「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。「まどろみ」は「まどろみ」のキーワードに「まどろみ」が書かれている。

○考えを深め自己内対話を行うまでには至らないものの、心理的な描写に触れて、現代に生きる自分たちとの比較を試みようとしている。話し合う活動から生まれたこのような生徒の気づきもまた、第3学年での学習へとつながっていった。

《生徒曰》（「芋粥」芥川龍之介）

本のリーフレットを作ろう②-2

く無言館の青春く

三年二組

☆本のリーフレットを作り、小説の魅力に触れ、互いの作品を読みあうことで、自らの考えを広げ深めよう。

(活動内容)

1時間目 「無言庵の青春」を読み、筆者の考えを読み取ろう。また、異なる価値観や認識に触れ、自らの考えを深めよう。

2時間目 自分の読書生活を振り返ろう。魅力のある作品を探そう。

（夏休みの宿題）あなたが選んだ文学作品を読もう。

↓3・4時間目 本のリーフレットを作ろう。

5時間目 友達と作品を読みあおう。

「はい、さうです。さういふことは、

㊦引用文

「いつになったら、二れに飽けることか、もう」と、二うまたた

④ 作品情報

芥川の代表作であり、大正五年24才のときに発表された。

羅任門、並乙

今昔物語

⑤ あらすじ(一〇〇〜二〇〇字) 主人公は、

		乗	飽	カ	に	か	男	う	あ
		、	か	あ	も	、	て	男	る
		た	せ	へ	、	に	同	が	遠
		五	申	た	、	り	団	い	い
		位	も	、	平	と	か	た	昔
		は	う	並	強	い	り		
		、	し	派	を	う		、	藤
		和	と	て	飽	拍	ば	れ	原
		に	い	位	ま	本	か	は	基
		の	う	の	る	た	に		經
		館	誘	高	ほ	、	さ	甚	に
		へ	い	い	ど	た	わ	だ	仕
		と	に	侍	食	、	た	風	ん
		赴	、	藤	べ	だ	り	采	て
		く	達	原	た	が	相	の	い
		こ	い	利	い	と	手	上	る
		と	た	に	と	ん	に	が	五
		に	が	の	い	ひ	さ	ら	仕
		た	ら	、	う	五	れ	わ	と
		る	も	が	夢	仕	た	い	い

1. 2. 3. 4. 5.

〈生徒A〉

048.6.13
(38.5)

[illegible]

昭和23年、正月に師事といふ名伏魔二、家に根柢に行、に天寧。酒を飲外、飲ばらに不寧。
そのまゝ寝てゐた。因に遺言もあつた趣に自分の悪習慣三つを「不寧は」いふ氣になつてゐた。
と多く教へた。何陽でグレイクに不寧への嫌妬です。いつの時代も嫌妬は嫌妬。
し、この出来事（不寧）といふ、自分の原因をもしめた。

漢文(一〇〇〜二〇〇字) 漢文又 面頁三三 綴紙二二 二於餘文に向て

[illegible]

〈生徒B〉

④ 作者情報

1921年（明治54年）3月1日生まれ。1927年（昭和2年）7月14日
 死没。（満35歳）小説家。短編小説。東京帝国大学文学部。
 東京市京橋区。（現中央区明石町）初期 歴史物。オノノミヤノ物（子）
 中期 芸術至上主義 晩年 生死に関する作品。東京帝国大学 経済学部の
 自伝 小説家としての生活 服毒自殺

の推薦文（100～200字）おもしろい文章で読みやすい

代	表	作	と	い	う	作	け	あ	て	人	々	の	心	情	情	景
五	他	で	和	に	の	身	形	は	が	は	ま	ま	り	と	目	深
か	ん	で	く	ろ	う	う	文	章	だ	は	ま	ま	情	や	行	動
細	か	く	描	写	さ	れ	て	い	る	の	は	こ	の	物	語	の
題	め	で	あ	る	ま	た	夢	に	対	し	て	の	個	置	観	と
人	間	間	作	の	後	り	な	う	社	会	の	悪	と	い	う	な
の	も	描	か	け	い	る	夢	を	追	う	身	込	め	い	い	男
で	け	ぞ	片	け	け	れ	た	い	澤	さ	も	魁	力	の	一	つ
口	で	い	ろ													

暗

(資料10)〈実践ウ〉本のリーフレットを作ろう・ワークシート②-3
〈生徒A〉

本のリーフレットを作ろう②-3
く無言館の青春く

☆本のリーフレットを作り、小説の魅力に触れ、互いの作品を読みあうことで、自らの考えを広げ深めよう。

（活動内容）

1時間目 「無言館の青春」を読み、筆者の考えを読み取ろう。また、異なる価値観や認識に触れ、自らの考えを深めよう。

2時間目 自分の読書生活を振り返ろう。魅力のある作品を探そう。

（豆休みの宿題）あなたが選んだ文学作品を読もう。

↓3・4時間目 本のリーフレットを作ろう。

5時間目 友達と作品を読みあおう。

④編纂後記(三〇〇、四〇〇字)

○「無言館の青春」の感想や、「エッセイを書く」を参考に書いてみよう。

が	こ	ろ	環	は	ら	業	ハ	心	思	通	に	分	み	自
あ	と	う	境	い	れ	て	戯	配	首	わ	徒	の	人	返
っ	け	か	を	か	た	は	の	す	も	た	順	こ	間	レ
た	重	か	。世	苦	ま	い	る	今	い	自	だ	と	は	て
要	り	間	そ	し	る	苦	か	も	分	し	皆	そ	る	ん
だ	生	に	れ	み	と	レ	に	ら	時	に	た	か	う	
	ま	知	と	そ	私	お	務	N	人	々	利	の	考	他
と	て		同	太	は	好	ら	は	益	だ	え	人	の	工
改	い	て	時	寧	思	も	で	他	そ	の	う	て	の	イ
め	く	も	に	は	う	か	く	い	ん	う	は	う	い	為
て	上	ら	表	く	仁	か	か	思	い	私	い	言	だ	人
痛	で	い	自	現	他	様	事	に	ら	う	こ	私	い	言
感		た	分	し	人	は	を	自	ど	自	と	も	い	の
さ	っ	い	の	た	の	現	こ	分	う	分	は	割	業	っ
せ	自	の	置	か	目	代	は	と	見	か	や	り	蔵	っ
ら	分	で	か	に	の	す	ま	う	辨	に	た	自	そ	結
れ	と	け	れ	た	縛	者	か	く	れ	に	た	自	分	局
る	持	た	て	り	者	な	見	る	は	い	分	の	心	は
も	っ	い	い	て	の	に	ど	せ	か	る	！	に	素	理
の		だ	る	は	け	も	る	と	と	と	素	理	自	詭

本のリーフレットを作ろう②-3

く無言館の青春く

三年二組

☆本のリーフレットを作り、小説の魅力に触れ、互いの友

を込めよう。

(活動内容)

1時間目 「無言の青香」を読み、筆者の考えを読み取ろう。また、異なる価値観や認識に触れ、自らの考えを深めよう。

2時間目 自分の読書生活を振り返ろう。魅力のある作品を探そう。

（夏休みの宿題）あなたが選んだ文学作品を読もう。

↓3・4時間目 本のリーフレットを作ろう。

5時間目 友達と作品を読みあおう。

⑤ 續集後記(三〇〇、四〇〇字)

○「無言館の青春」の感想や、「エッセイを書く」を参考に書いてみよう。

自分の考え（価値観）

変化・ゆさぶり

現代との比較

實體經驗

日作品への解釈・評価

一見

刀	時	と	大	奇	と		い	け	の	馬	無	い	れ	ま	か	一	二	は	
い	期	し	切	川		五	よ	れ	大	鹿	理	う	ほ	て	け	夢	と	夢	三
と	に	に	か	は	二	性	う	ば	切	に	無	二		何	が	を	に	の	の
突	二	の	を	一	れ	も	の		さ	で	理	と	一	度	あ	遠	(一)	ま	一
感	も	で		夢	で	私	刀	見	を	ま	と	だ	夢	と	る	う	見	ま	草
で	出	は	れ	を	は	も	い	解	突	刀	口	。	は	は	よ	者	と	で	網
ま	会	は	だ	追	い	突	ト	士	感	い	に	勉	口	く	う	に	れ	あ	し
た	う	い	と	う	け	際	間	れ	し	と	出	張	に	言	に	必	る	る	と
。	へ	だ	思	し	は	は	へ	た	た	真	し	に	出	わ	思	要	。	ほ	い
	ま	う	い	と	い	同	と	り	。	サ	と	し	さ	れ	う	な	だ	う	う
	作	う	見	は	と	じ	育		今	い	し	と	な	と	。	の	が	が	物
	品	が	本	ど	い	立	。	か	も	た	ま	も	い	い	私	は		牌	語
	だ	。	を	う	う	場	て	ら	昔	と	う	何	と	る	自	何	と	く	の
	。	中	示	い	真	な	し	が	も	同		に	実	二	身	が	の	も	テ
	た	学	し	う	情	の	す	わ		時	五	し	現	と	今	し	ま	の	い
	の	う	と	こ	ち	だ	う	れ	向	に	は	て	し	が	ま	と	た	だ	と
	か	舞	依	と	が	と	の	た	上	っ	の	も	は	あ	で	い	深	し	は
	も	の	元	ど	生	感	で	り	心	向	二	す	い	る	生	う	く	と	
	し	二	よ	何	じ	じ	あ	と	が	よ	と	ぐ	。	き	段	に	い	一	
	れ	の	う	が	た	る	る	致	無	に	を	に	と	そ	て	げ	は	う	夢

人間失格

太宰 治

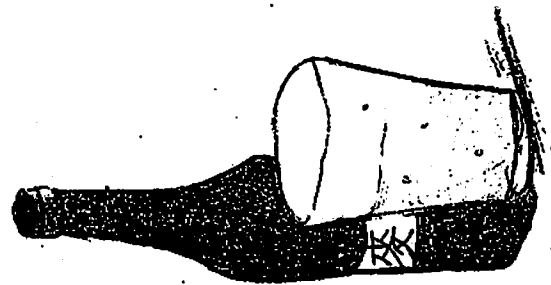


編集後記

葉蔵さん、すばらしい主人公大座葉蔵の行いは、
自分と合う。"エゴイズム"だ。たのびは？と、顔み
近いてそう思う。た。
人間は皆、他人の為だ。と言いつつ、結局は
自分のことしか考えている。葉蔵はその心理
に、従順である。たのびだろう。私も、その一面にある
葉蔵の言動に共感してしまっていることに
気付いた。そんな自分だが、少し、様子は、た。
昔も今も、人は他人からどう見られるかを
気にする。SNSのどきどきには自分を見せたい
が、葉蔵の苦しみ、もどき様は現代の若者
に当てはまる。た気がした。他人の目と縛りつけれ
た苦しみを、たは表現した。たのびは、た。
現代の日本を象徴して、自ら命を断つ人が多い。
そんな人に読んでほしい。"自分を縛る"とい
うこと。"自信と持つ"ことへの抵抗が、たのびとい
う痛感で、せうせう作品である。た。

3月2日

「恥心の多生涯を
送ってしまふ」
人間失格



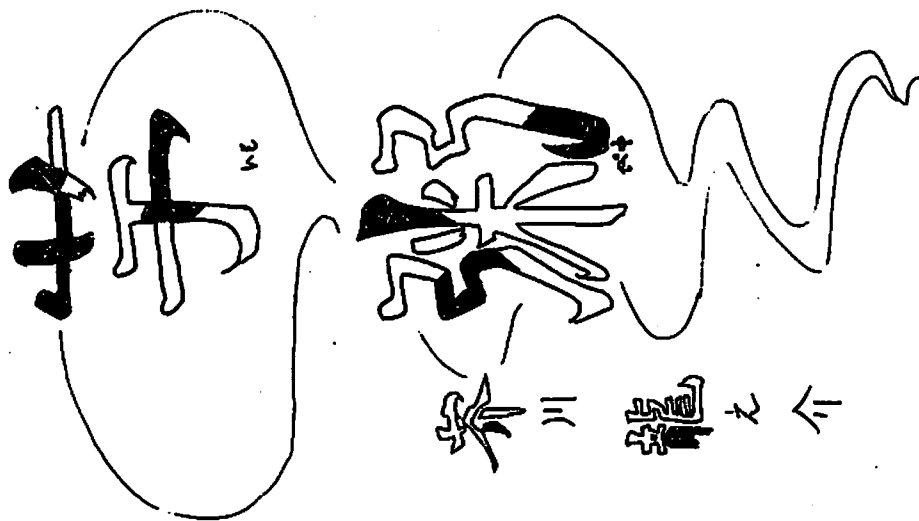
幅広の1世代に読まれ、現代の若者が共感
できるところ作品NO.1だ。

七人即免稅
自費康復

昭和23年、正月に師事している水谷師二一家に招かれて不審。
酒を飲み、酔ひ、おたふ不審はさへまき盡してしまふ。目を
覚ますと、不審な顔に自分の唇が閉じては、た。不審は
いい。唇に上はさる。さへまき。と笑う数人の。そう、これは
原料陽で、グレイクした不審へ、嫁娘。
いつ、時だとも娘はは嫁で可ね...

6月13日. 入水。

6月13日. 入水。



この物語のテーマは、一見「夢は夢のままではあるが、醒めぬものだ」ということにとれる。だが、その夢に深くは「夢を造る者」に必要なのは何か」という問いかけがあるように思える。

私自身今まで生きてきて何故とわく言われていた事がある。それは、「夢は口に出さないと実現しない」という事だ。勉強にしても同じにしろ、多くの無理無理と口に出してしまふ。至極の二とを馬鹿にできぬかと笑われたと同時に、「向上心」の大切さを実感した。今も昔も、向上心が無ければ、見放されたり、からかわれたりとかいふような辛い人間へと育ってしまうのである。

至極も私も実際は同じ立場なのだと感じると、二水ではいかにいかに苦悶が生じる。たゞその苦悶が全てを意味し、深い絶望であるから、あくまで一つの夢であるが、芥川は「夢を造る」とはどくう二とで胸が大切な事、わざと悪い見本を示して振えようとしたのでは無いだろうか。中世3世紀のこの時期にこそ出会うべき作品だともいえるかもしれない。

3月2日

「いっになら、一瞬に飽けることかろう」



「大夫殿は、夢に飽かれたことがないそうなの」

著につづ



名前：芥川龍之介
 誕生日：1892（明治25）年 3月1日
 死没：1927（昭和2）年 7月2日
 （満34才）
 出身地：東京市京橋区（現 中央区 明石町）
 専攻：東京帝国大学文学部（理 国文学部）
 フォトリ：小説小説
 代表作：『羅生門』『鼻』『蜘蛛の糸』など

おねには 歴史小説やキリシタン小説

『鼻』『羅生門』『蜘蛛の糸』など

中期には 藝術至上主義

『蜘蛛の糸』など

晩年には 生死に関する作品

『羅生門』『鼻』『蜘蛛の糸』など
 などとされている。

能に惹かれた人生

芸術家のため、高校に無試験で入学したり、
 その高慢も二面と筆を執り、高層階に上り下り。

『鼻』は、夏目漱石に絶賛され、後に漱石の『門』と
 対比。

知らずじ

ある遠い昔、藤原某姓に仕えている五位という男が
 いた。甚だ風流のおおきな男で、周囲から、高處に上れた
 り、相方にされたりという始末だった。

だが、そんな五位にも「年増を飽きるほど食べた」と
 という噂があった。立派な位の高い侍 藤原利仁の「お飽
 かせ中さう（飽きるほど食べたさう）」という諺に、
 近い頃から来た五位は、利仁の飽へ赴くことになる。



「年増」について

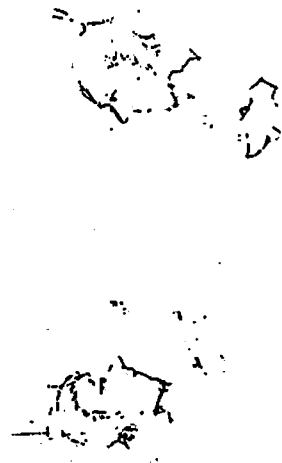
芥川龍之介の『羅生門』『鼻』などとは
 代表作である。

大正5年 9月（御蔵の頃）に発表された。

『今昔物語集』から取った物語である。

（『羅生門』と同一。）

芥川作品の中では、最初期であり、後期の作品
 作風とは異なっている。



力

代表作というだけあって、人々の心、情、
 五臓六腑の奥まで、はつきりと目に写る
 てくさうな文章だ。

感情や行動、間が細かく描写されているのはこの
 話の一つの特徴である。

また、夢に於ける極彩色、人間関係が繰り返す
 文壇の裏というふうにも描かれている。

「夢を語る上には、月の影」だ、片付けられない
 深さも鬼の爪の一つと評している。

年増も年増って何？

今、年増と聞くと、37まいもの入った
 何か中を想像するだろう。でも、おかしな
 米は必領だ。

だが、物語の文と参照すると
 「年増とは山の年を中に込めんと、それと甘島の
 汁で煮え、年増のことが言われている。」
 とある。

つまり、この話の年増は

○ 山芋を指している

○ 甘い甘味料で煮てある（今にちがふ心で読むと）

○ 米が入っている

と、考えられているのだ。

食物を甘く汁と一緒に食べようという料理法なの
 だろうか？

〈生徒Dの編集後記〉（芥川龍之介「河童」）

-18-

〈生徒Eの編集後記〉(太宰治「人間失格」)

＜編集後記＞

組しも自分に違和感をもったり、本当の
自分がわからなくなることもある。
人と向き合うことに恐怖を感じたとき。
読者である自分ならどうあるだろうか。
誰と愛せど誰を頼。それは正しいかわか
らない葉蔵のように逃げ道を探して。
罪の意識を感じながらも止めることで
こたえの行動に駆られることもあるだろう。
現代においても葉蔵と同じ気持ちで
最終的に悲しい方向にいったらう人は
少しは少ない。そのように人は批判や偏見を
受けることがあるだろう。私は、そのように思
ふと作。という私たちの名が欲しいと感じた。
大塚の気持ちから葉蔵を通じて描かれている
ことに気付いた時、私のように作品の中に
引き込まれるだろう。

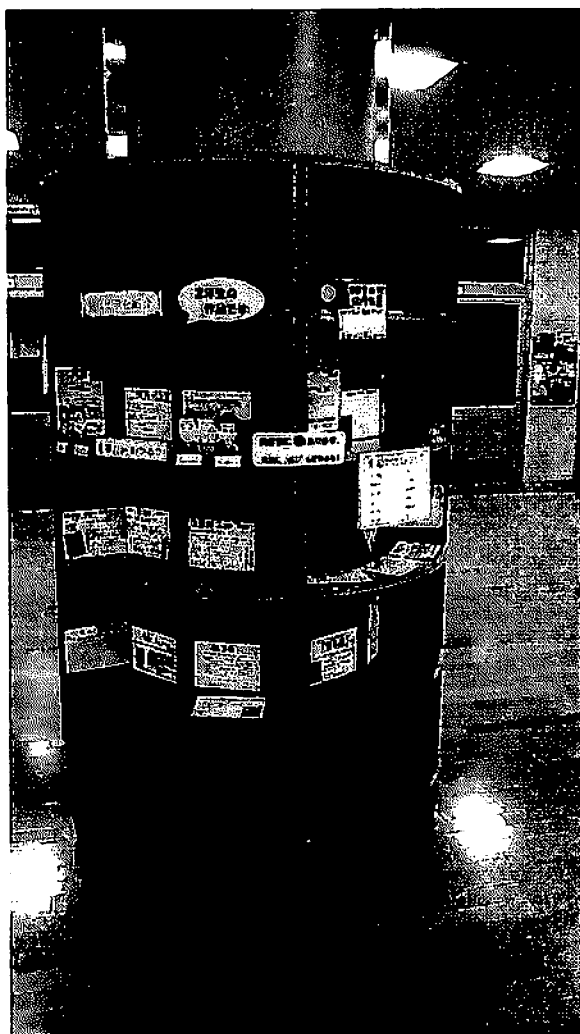
3月2組

〈生徒Eに対する生徒Dのワークシート〉

見	な	は	持	て	い	分	社	独	考	ニ	た	
直	い	達	ち	ま	同	く	会	特	私	え	と	E
さ	か	う	に	た	じ	う	の	の	は	を	に	
ち	と	人	気	視	考	つ	常	考	自	友	心	人
リ		を	づ	E	点	ニ	社	識	え	身	え	物
れ	社	を	い		と	と	会	た	を	の	な	か
は	会	う	て	さ	も	も	の	つ	も	り	か	感
な	に	思	い	ん	終	常	い	っ	ら	じ	当	
う	対	う	る	も	て	え	識	こ	た	フ	て	自
な	す	社	私	い	か	述	人	し	主	し	分	自
い	る	会	E	も	た	て	へ	が	ッ	人	ま	分
と	常	を			な	いた		人	公	う	そ	を
改	識	作	さ	主	い			日	の	の	の	う
め	か	'	人	人	哲	た	私	い	中	気	で	な
て	覆	て	の	公	学	人	と	目	で	持	は	リ
強	さ	い	考	の	的	間		E	で	る	な	た
く	れ	る	入	行	部	か			み	周	に	い
思	た	の	を	動	分	一	さ	ら	団	同	か	き
う		は	読	か	に	度	人	れ	の	情	に	く
機	社	自	ん	ら	触	は	は	る	常	し	と	人
会	会	分	で		れ	疑	っ	こ	識	て	自	と
た	の	た	作		て	間	本	と	に	い	分	向
な	常	ち	常	者	い	に	当	か	よ	る	自	ま
	'	識	じ	識	の	る	持	の	う	り	身	合
た	を		と	気	点	つ	自				の	う

○生徒Eと同様に、社会に対して同じ見方をしていることを分析している。また、「主人公の行動から、作者の気持ちに気づいている。」というように、互いの読み方について言及している点にも注目したい。作者の思いの投影を読むという読みの方略の主体的発見は、学習者の今後の読書生活に影響を与えるものと考えられる。

(資料14) 〈実践イ〉本のポップを作ろう・ポップ作品の掲示



○授業で作成したポップは図書館での掲示に活用した。図書館司書の協力を受けて、クイズや作家の紹介などのコーナーも設けられている。

